第２回観光需要の年間平準化に関する万国津梁会議

日　時：令和５年１月10日（火）14:00～15:54
場　所：沖縄県庁６階第２特別会議室
出席者：末吉康敏委員長、花牟礼真一委員、東良和委員、平田大一委員、大島佐喜子委員、有木真理委員、杉本健次委員、下地芳郎副委員長（欠席）、安永淳一委員（欠席）

１.開会
【事務局　金城班長（観光政策課）】
　ただいまから令和４年度第２回観光需要の年間平準化に関する万国津梁会議を開催させていただきます。
　出席者についてですが、本日はコンベンションビュローの下地会長が急遽欠席となっております。
　ここからの進行につきましては末吉委員長にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

【末吉委員長】
　それでは、私のほうで進行させていただきます。
　議事に入る前に、前回欠席された大島委員に自己紹介を兼ねて一言お願い申し上げます。

【大島委員】
　１回目は欠席しました。着座にて失礼いたします。
　竹富町観光協会、大島佐喜子と申します。
　この会議とは逆行するのですが、西表島は世界自然遺産になっていることもありますので、オフは絶対必要だと思いながら１回目の会議の説明を受けました。１回目の報告書は全部読ませていただきました。
　離島という土地柄で、少し沖縄本島とは温度差があるといつも感じているのですが、離島代表として皆様のお力になれればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

２.議事
【末吉委員長】
　ありがとうございました。
　議事の進行に当たり、皆様の御協力をよろしくお願いします。本日は２時開会、４時閉会となっております。
　それでは、初めに事務局より資料１の平準化の課題・方針と成功事例について説明していただきたいと思います。事務局、よろしくお願いします。

(1)平準化の課題・方針と成功事例について
【事務局】
　資料１に沿って説明

【末吉委員長】
　ありがとうございました。
　かいつまんでの説明ではございましたけど、事前に皆さんに資料も送っていますので、

委員の皆さんから資料１について御意見を伺いたいと思います。お一人３分ほどでお願いします。
　杉本委員、どうぞ。

【杉本委員】
　最初に２点、文言の修正をお願いしたいところがあります。
　まず資料１の１ページ、平準化の考え方というところで、「今後は観光収入の平準化とピーク時期の需要の分散化を目標」と書いてあります。私は、ピーク時期の需要の分散化も１つの目標ではあると思いますけど、前提となるような大きな目標ではないのではないかと思っています。「観光収入の平準化を目指し、オフ期における需要の増加と消費額を向上させること」を目標とすべきではないかと思います。併せて、「ピーク期の需要の分散化を図る」と変えられたほうがより分かりやすくなるのではないかと思います。
　次に、３ページの課題①で、沖縄県の消費単価がピークとそれ以外とで差があるということが示されています。これは全国どこでもそうです。ただ、沖縄県は極端にその差があるということが問題なので、ここは「極端に差がある」という表現に変えられるべきだと思います。
　加えて、ぜひ参考にしてほしいということでご紹介した９ページ目の「京の冬の旅」キャンペーンについて補足ですが、これは施策の内容そのものではなく、京都の総力を挙げた施策という部分を参考にしていただきたいです。例えば普段は観光に関係ない寺院も全面的に協力していますし、カード会社がいろいろなレストランと組みながらレストランウィークのような取組をこの時期にやっていることや、推進体制が観光協会だけではなくて、商工会議所等も大きな柱となっていることなどです。いわゆる地域の総合力を生かしてオフ期の需要喚起策をやっており、その体制や仕組みをぜひ参考にしていただきたいと思い紹介いたしました。以上です。

【末吉委員長】
　ありがとうございます。
　杉本委員がおっしゃったように、２ページのピーク期の需要の分散化については、逆にオフ期の需要をピーク期の水準に上げていかなければ、入域観光客数は1,500万人にならないと思います。

【杉本委員】
　今日は下地会長が欠席ですが、沖縄観光コンベンションビューロー（ＯＣＶＢ）について、マーケティング力を強化すべきだと思っています。
　事業者向けカレンダーの作成は県がまとめるというより、ＯＣＶＢがまとめるべき仕事ではないかと思います。ただ単にいろいろなイベントの開催情報を出すだけではなく、そうした情報をもとにしたマーケットの見通しと、３年先ぐらいまでのＯＣＶＢとしてのマーケティングの考え方、更に１年先までは、東会長がおっしゃっていたような、この時期に価格を下げるべきではないなどといった、きめ細かなマーケティングの情報を出すべきではないでしょうか。単なる行事の一覧表ではなくて、だからどうすべきだということを発信する。ＯＣＶＢはプロモーション施策など様々な施策を担っていますが、それらに加えて大きな柱にすべき役割かと思います。

【末吉委員長】
　ありがとうございました。
　東委員お願いします。

【東委員】
　前回皆さんが発言されたことがかなり細かく反映されているので、事務局のやる気はすばらしいと思います。なかなか反映されないことが多いのですが、相当盛り込まれており感謝します。
　それから、弊社が過去に作っていたカレンダーについて、現在は大変だと理由と、コロナもあり作らなくなりましたが、このようなカレンダーは、３年分を一覧で見られるからこそいいのだと思います。スマホでスケジュール管理していても、小さくてイメージが湧かないです。私は今日先ほどまで、今年のカレンダーを全部貼り付けて、自分がいる日といない日、イベントの日など整理していました。壁に貼って１度に見られるようなものもあれば、意識が高まりやすいかと思います。スポンサーを見つけて広告を周りに載せてもいいので、そのようなカレンダーを県とＯＣＶＢで作ってもらえるといいかと思います。今のところ以上でございます。

【末吉委員長】
　ありがとうございます。

【花牟礼委員】
　若干今の話と重複するのですが、資料を作ってきましたので、後ほど10分程度お時間をいただければと思います。
　私は観光の専門家ではないので、皆さんと切り口が若干違うかと思いますが、前回した話のうち、課題の⑤、方針の⑤で組織や体制づくりをきちんと盛り込んでいただいているのは非常に嬉しく思います。
　観光業界はリーディング産業で、非常に俯瞰的でかつシナジーが大きいです。観光業界のみで考えるのではなく、「観光×他の産業」など、観光にいろいろなものを掛けあわせて考えていただきたいです。観光業界と他産業のコミュニケーションにおいて施策を練っていただきたい。そのコミュニケーションの中で、観光業界だけでは気づかないものが必ずあるはずで、それが宝になると思います。

（資料:観光平準化への考察）
　観光平準化の位置づけを少し考えてみました。
　まず、「稼ぐ力」に関する万国津梁会議での観光平準化の提言というのは、新沖縄21世紀ビジョンの将来像３を構成する項目である「県民所得の着実な向上」のための企業の稼ぐ力の達成につながる提案です。
　一方で、第６次沖縄県観光振興基本計画に対する施策として位置づけますと、21世紀ビジョンの将来像３だけではなく、５つの将来像すべてへの貢献と捉えることができます。５つの将来像というのは、「将来像１　観光振興の沖縄らしい自然と歴史、文化を大切にする島」などですが、これらを眺めると、観光平準化について見えてくる視点が２つあると考えています。
　１つは、それぞれ将来像を構成する項目が観光平準化に寄与するということ、それからもう１つは、観光平準化がほかの産業や、それぞれの項目への貢献にもなるということです。要するに相互作用があり、ウィンウィンの関係であるということです。例えば将来像１には、自然環境の保全や、沖縄文化の保存、悠久の歴史や伝統文化に育まれた魅力ある空間と風土の形成などが書いてあります。将来像３には、地域を支える県産品、スポーツアイランドの形成、島々の自然や魅力を生かした産業振興、将来像４には離島を核とする交流の活性化が書いてあります。これらの中には観光平準化に寄与する項目がたくさんあ

りますし、逆に観光平準化を進めることによって、それらの項目を達成することもできます。
　実は第６次沖縄観光振興基本計画にも、例えばソフトパワーを活用した取組など似たような項目があります。このような切り口でも考えていただけたらと思います。
　次のページです。
　これらを踏まえて、観光平準化を稼ぐ力に結びつけるための手法としては、より広い視点で捉える必要があるのではないかと思います。「観光産業は沖縄のリーディング産業であり、裾野が広いがゆえに、より俯瞰的、横断的な思考の必要性がある。そこに埋もれている財産がある」と書きました。これは先ほどお話しした点です。
　それから、「組織横断的、クロスファンクショナル的な組織の構築、もしくは会議体の創出。観光目線だけではなく、その他産業とのコミュニケーションを頻繁に取ることにより、観光平準化のみならず観光振興につながる情報、気づきが見つかるものと思料。また観光がほかの産業の振興につながるという視点も創出される」。これについては、課題⑤、方針⑤に書かれていますのでぜひお願いしたいと思います。
　それから、「平準化のための民間活力を引き出すための、例えば助成金の仕組みやＫＰＩの策定」、これは第６次観光振興基本計画の中には見つけられなかったので、こうしたものもあればいいかと思います。
　次のページです。
　俯瞰的、横断的、双方向的という切り口で事例をお話ししたいと思います。
　まずは空手ツーリズムです。これは第６次観光振興基本計画にも挙げられていますが、空手ツーリズムを振興することにより、例えば高齢化で製造者が減少している釵（サイ）という武具の生産を促すことにつながります。
　それから、歴史的に空手とつながりの深い泡盛産業の振興にも寄与しますので、観光産業だけではなくほかの産業への波及という点も意識する視点が必要だと思っております。
　次のページです。
　観光ＤＸです。新沖縄21世紀ビジョンの基本計画や、第６次観光振興基本計画にも挙げられていますが、これを進めるためには、ぜひ「観光×ＩＳＣＯ」「観光×情報産業」の交流を積極的に進めていただきたいと思います。
　これに関する事例として、一般社団法人宿泊施設関連協会が地域観光ＤＸモデルとしてＡＢＡ（エリアブランドアプリ）を提言しています。エリアでデータを共有してオープンデータ化するということですが、競争しても意味のないもの、差別化にならないものを共有するという取組です。城崎温泉で実験をしているのですが、このように宿泊データを共有することで、安売りプランを出す必要がなくなったそうです。高級宿とそうではない宿との関連性があり、安売りプランを出す必要がなくなったことで、売上げを確保することにつながったという、ビッグデータの活用方法です。これも観光平準化のヒントになるのではないかと思います。
　次のページです。
　大分の事例です。面白いので、動画を見ていただきたいです。

（大分県観光政策課 動画視聴）

　ありがとうございます。
　宇宙の温泉県大分として、大分県観光政策課が作っています。今、日本の中で宇宙港を標榜しているのが北海道、和歌山、大分、そして沖縄です。沖縄は県を挙げて宇宙産業を誘致しようしていますが、大分は宇宙産業を観光にも活用しようということで、観光業界、商業界、それから工業界、農業界が全部一体となって動いています。観光産業はそれをう

まく活用しながらブランド化をしようとしています。
　下地島では下地島宇宙港構想ということで、ＰＤエアロスペース社という会社が有人飛行のための実験を行っています。沖縄にとっては宇宙も非常に大きなチャンスになるのですが、残念ながら沖縄県はまだその盛り上がりに欠けているという状況です。
　次のページです。
　皆さまも御存じのやんばるアートフェスティバルですが、「観光×アート」になるのではないかと思います。時間や地域の平準化に資する取組だと思いますが、ここで言いたいことは、「観光×〇〇」という視点が非常に大事だということです。「〇〇」の部分を、例えばワーケーションやコワーキングスペースに活用すると、アートワーケーションや芸能ワーケーション、空手ワーケーションなどができて、そこで化学反応が起きる可能性があるので、参考になるのではないかと思います。
　最後に、私が深く関わっているリゾテックについてお話をしたいと思います。リゾテックは観光産業をテクノロジーで支えようという、クロステック的な考え方が原点です。情報産業で観光産業を支えていこうということなのですが、観光業界の方々の活用がまだ足りないと思います。恐らく文化観光スポーツ部の方々も、これは商工労働部の案件だということであまり接点がないか、もしくはコミュニケーションがあまり取れていないのではないかと思います。このように観光をサポートする動きをしている地域はほかにありません。ＩＳＣＯとか情報産業界と積極的にコミュニケーションを取りながら、一緒になって活用すべきではないかと思います。
　ちなみに2023年は沖縄市でResortech　ＥＸＰＯが開催されます。うるま市や北谷などへの面的な広域展開や、北部へのつなぎ込みも現在検討をしておりますので、これも観光業界にとってプラスに働くのではないかと思います。
　最後に、冒頭にも少し話をしましたが、ほかの産業界、ほかの組織などと横断的な取組をしていただきたい。「観光×〇〇」を観光業界の方だけでやるのではなく、「観光×〇〇」の「〇〇」をやっている業界の方や組織とぜひコミュニケーションを取っていただきたい。そこにいろいろな気づきがあるはずです。それが観光平準化などの観光施策につながっていくはずで、第６次観光振興基本計画に掲げられている県民の幸せにつながっていきますので、ぜひそのような考え方で進めていただければと思います。
　観光はリーディング産業ですので、庁内でも様々な部署との横断的な取組を観光業界が引っ張っていくという気持ちでやっていただければと思います。以上です。

【末吉委員長】
　ありがとうございます。
　多くの人が観光に興味を持っているようで、県外や海外のイオンで沖縄の物産展をやると、一番売れるのが品物ではなくて観光のパンフレットです。花牟礼委員がおっしゃった「観光×〇〇」の取組は非常にいいですね。
　リゾテックの話がありましたので、出展された有木さん、何かありましたら。

【有木委員】
　ありがとうございます。
　リゾテックの観点は後ほどなのですが、まず資料を見て思ったことは打ち手先行型にならないようにすべきということです。先ほど杉本委員も役割分担とおっしゃっていましたが、マーケティングの部分がとても重要だと思います。例えばＨＴＡさんにお伺いしてハワイのお話を伺ったことがあるのですが、マーケティング、ディベロップメント、プロモーションという３つの施策のうち、マーケティングとプロモーションはハワイ州、ディベロップメントは民間という形で役割分担をしているそうです。また、いろいろ島がある中

で、ハワイ州が各島のターゲットや作るべき商品を示し、作った商品をまたハワイ州がプロモーションをかけていくという役割分担がなされています。
　先ほど杉本委員からＯＣＶＢにマーケティングを担っていただくべきではないかというお話がありましたが、私はここでコンシューマーとカンパニー、それからコンペティターという３Ｃの観点が重要だと思っています。特にコンペティターは、例えば最後のページのカレンダーを作る上でもとても重要なのではないかと思います。私はスポーツが専門なのでスポーツツーリズムで言いますと、例えばマラソン大会に２週連続では出ないということがあると思います。各地域がどういう取組をしていて、沖縄全体としてはどの時期に何をすべきか、スポーツにかかわらず様々なイベントがどこと競合しているかを捉まえることで、イベントのやり方も変わってくると思います。
　リゾテックに関しては、私は観光の立場で入っているのですが、観光側の観点がなかなか薄いので、そこは私も皆さまと一緒にできたらと思っております。

【末吉委員長】
　ありがとうございました。ほかに御意見がございましたら。
　平田委員どうぞ。

【平田委員】
　２つあります。１つは参考資料１に、第１回会議で話されたこととそれに対する反映箇所が書かれていて、私のものが３ページにあります。最後の提言の「アクションプランとして実行していく実働部隊が必要、また10年後にこの検討会をやらなくてもいいように、アクションしていく側の立場で考え、つくり上げていきたい」という所信表明を含めての話に対して、「第２回会議の議題として設定」と書いてありますので、ここが重要だと思います。
　僕が提案していることは課題⑤、方針⑤に反映されているのですが、読んでいる限り分かりづらいです。言いたかったことがふわっとした表現にされており、言葉は悪いけど刺さらない。これを読んで市町村が連携しようと思うか疑問です。例えば方針⑤について、私はもう少し強い表現でお話しした記憶があります。例えば文化観光スポーツ部という文化と観光とスポーツが横串に刺されたような部は、県にあっても市町村にはないです。読谷村もつくろうとしましたがつくれませんでした。理由は分かりませんが、おそらく市町村には市町村なりの形があるからなのではないかと思います。しかし状態がそろっていないと、県との連携は難しいというニュアンスを感じました。どうしてもこのような書きぶりになるのかとは思いますが、10年後も同じ課題を議論しないためにも、もっと市町村を含めて本気で議論すべきです。
　先ほどの「観光×○○」と同じで、対等の関係である必要があります。文化観光と言えば20年以上前、私が文化観光スポーツ部長になる前は、文化と観光はずっとけんかをしていました。文化の側は、これは見世物ではない、観光客に合わせてやるものではないと言っていましたし、現在も伝統芸能の中にはそのような考え方があるかもしれません。一方で観光の側からは、毎回できるのか、修学旅行向けにやる場合は平日にできないか、という要望があり、土日しか動けない場所は対象外になります。そうしてぶつかってきたものが、文化観光スポーツ部をつくったことで四つに組まなければいけなくなりました。
　市町村との連携においてももう少しひざ詰めで、より入りこむ形で進めるべきかと思います。書きぶりに関しては全体的に、もう少しフックのかかるような、届く言葉を選ぶ必要があると思います。まだ私の中に答えがあるわけではないのですが、そのような違和感があることだけ伝えておきます。
　もう１つは、先ほど大島委員が「オフは絶対に必要」とおっしゃいましたが、これがま

さに大島委員がここにいらっしゃる理由だと思いました。島のタイムというか、島の流れでいったらその通りだと思います。竹富島など一部の島にひっきりなしに観光客が来るような状態を考えると、オフとオンというのはむしろ四季を彩るような意味があるのではないかと思います。私に足りなかった視点から、ここで議論するべきこととして改めて思ったことは、地域ごとのオン・オフがあったとして、それを沖縄全体でどのようにカバーしていくかです。沖縄全体の中で、例えば海がオフのシーズンは劇場がオンになるなど、季節に合わせた取組みが沖縄式の平準化になると思います。平準化は単なる人数の分散ではなく、場所や取組み方も含めて考えるべきということです。大島委員にもこの部分のご意見を聞いてみたいというボールを最後に投げて、話を終わりたいと思います。

【大島委員】

よろしいでしょうか。どちらかというと私は現場側の意見です。特に西表島に限って言いますとオンとオフがはっきりしています。なぜならオンシーズンは従業員たちの休みが取れないためです。星野リゾートさんもそうですが、法定休日も取れないということで、１月の閑散期に閉めて休みを取らせます。

また冬は雨が多いです。那覇は天気がいいですけど、西表島は今朝、結構な雨が降っていました。気候変動で亜熱帯地域から熱帯地域になろうとしており、春夏秋冬を感じられず、冬場は雨期と乾期だけになるのではないかと思うほど変わってきています。

西表島は西と東で分かれていますが、私が住んでいる西側は夏がピークで、体験レジャーをする観光客が圧倒的に多いです。一方、東部は冬がピークでして、団体旅行が多いためバスで観光する方が多いです。同じ島の中でもオンとオフが大きく分かれています。

八重山全体で見ますと、イベントは各地域でやっていますが、どうしてもはっきり分かれてしまいます。特に離島に関しては、夏場に忙しかったため、オフ期は天気も悪いので民宿やレストラン、食堂も全部閉めてしまいます。そうなると、コンビニもないので観光客はどうにもできなくなる。そういう悪循環をさせたくありません。

各地域では、平準化をするために頑張って村おこしをやっていると思います。例えば座間味は冬場のホエールウォッチング、与那国はハンマーヘッドで冬場がものすごく忙しい。11月は座間味で座間味まつりをやっていますし、八重山で言えば黒島は２月の終わりに牛まつりをやります。西表は村おこしとして、町民の健康づくりのためにヤマネコマラソンを他のイベントと被らないよう努力しています。

さきほど役割分担が必要という話がありましたが、各地域が既に行っていることをもっと吸い上げてマーケティングをしてもらうほうが良いと思います。例えば売り出し方として、京の冬の旅のように、冬をマイナーに捉えるのではなく、うまいキャッチコピーで、冬の沖縄もいいところがある、という形でマーケティングに力を入れるほうが先ではないかと思います。県やＯＣＶＢの主導型で、各地域にこれをしてくださいと役割を与えるのではなく、すでに各地区に取組があるので、それをもっと細かく吸い上げることを優先すべきかと思います。

また、特に自然に関しては、現在オーバーツーリズムが問題となっており、エコツーリズム推進法で全体の観光管理に関しては国から認可を受けました。しかし自然保護ではないです。自然の利用と保全を全面的に打ち出していきたいと思っています。保全だけをするなら人は入るなということになります。私たちはそれをうまく利用して経済を回しているわけなので、保護とか保全だけを捉えずに、保全と利用という言葉をどこかに残してほしいと思います。以上です。

【東委員】

私も前回お話したと思いますが、今のお二人の意見を受けて、地域によって季節性が違

うということを踏まえながら、沖縄県全体として考えていけばいいと思います。まさに花牟礼委員がリードしている幸福度指数もそうですが、我々のような旅行会社としては、冬場の与那国のハンマーヘッドシャークには助けられています。

今日から24日までは、読谷の星のやも休みです。２週間休んでもきちんと健全経営ができるような体制をつくれるならそのほうがいいです。平準化というのは収益を上げるための手段であって目的ではないわけです。

特に座間味や慶良間では、昔はダイビングがオフの時期はスキー場のインストラクターに行く人もたくさんいましたが、今は閉めています。ホエールウォッチングを少しやっているところがある程度です。それでも、ほかの10か月間で生計を立てられるのであれば、それは幸せな生き方だと思います。そのほうが沖縄のハピネスという部分で、逆に売りになるのではないでしょうか。本土の旅館の中には、コロナ禍を経て従業員の待遇なども考えて、平日休むところも出てきています。陣屋さんは週休３日をやっていますが、それでも成り立っているわけです。

平準化だから一年中回そうという考え方は、今後10年間の計画としては少し外れているのではないかと思います。自然も人もそうだと思いますが、今後の観光の在り方としては、２か月休んでも健全経営しましょうということを、どこかにうまく書けたらいいと思います。しかしそれをどう提言に書き込むかが難しいと思います。平準化すべきと言っておきながら、オフの時期は休みましょうと言うのは難しいのですが、本来はそこが目標になるのだと思います。

【末吉委員長】

これは難しい論点です。まずは豊かにならなければ休めないです。

【東委員】

ですので、平準化は目的ではなく手段であるということを書いてくれたことはいいと思います。その意味はまさにそういうことかと思います。

【杉本委員】

そこについては、ハードを持っているかどうかで変わるかと思います。同じ観光業の中でも業種によって異なるので、それぞれの目指すべき平準化について議論するということをどこかで記載すれば良いのではないかと思います。

今回は具体的な打ち手を議論することになっていたかと思います。それを踏まえて、少し話がずれるかもしれませんが、総論で１つ、総論に少し具体論が混じったことを１つ、より具体的なことを１つ、３点お話をしたいと思います。

１点目に総論として、コンテンツ開発は、外部の人だけでも、沖縄の人たちだけでもできることではなく、外部と内部の知恵を生かしながら、沖縄の人たちが主体となってつくり上げていくことがとても大事だと思います。例えば弊社が沖縄で三十数年間続けている「杜の賑い」は大成功しているイベントだと思います。これは沖縄の地元の踊り手がいなければ絶対に実現できなかったことです。一方で、沖縄の踊り手だけ、今までの沖縄のやり方だけでもできなかったと思います。鷹の羽先生という、外部から異なる経験を持ってきた方々とがうまくかみ合うことで「杜の賑い」ができたのだと思います。コンテンツ開発のためにはうまく外の力も利用しながら、沖縄が主体となって取り組んでいくことが大事だと思います。

２点目に各論として、繰り返しになりますが、ＯＣＶＢのマーケティング機能強化がとても重要だと思います。施策の実行者としてだけではなく、司令塔としての機能強化が必要だと思います。

その中で、東会長がおっしゃった３年スパンと１年スパンのカレンダーについては、現在の取組を踏まえて、まずはＯＣＶＢの考え方を載せたものからでも、来年からスタートさせてはどうかと思います。

３点目はより具体的なことですが、修学旅行についてです。修学旅行は秋に集中していますが、バスが全然足りていないので、来年は成り立たない可能性があります。そこで、修学旅行を２月、３月に誘致してはどうかと思います。しかしこれは大変な力業です。２月、３月は受験の問題がありますし、各教育委員会の考え方もあります。こうした理由から進まなくなってしまうのですが、かつて沖縄は、航空会社にもお願いして航空運賃を特別に安くしてもらい、秋の修学旅行を春に誘致したという成功事例があります。全国では、例えば信州はスキーという新たなコンテンツをつくり上げて、２月、３月に修学旅行を誘致して大成功しています。

これは受け地側の観光事業者だけでは無理ですし、ＯＣＶＢが入っても無理です。県が一緒になり、各所に対するお願いも含めて進める必要があります。こうした具体的なところから動き始めていけば良いかと思います。

【末吉委員長】

確かに杜の賑いは非常に成功しており、今回は行けませんが、毎年楽しみにしています。

昨年の観光はゼロからやり直しだということで、沖縄の観光元年だと言いました。そこでカレンダーに関してですが、１月から12月までの沖縄の各地域の、スポーツや芸能などの動画で作ってはどうかと思います。沖縄の観光と物産展をするときに、沖縄の観光の動画は必ず立って見ている人が10名ぐらいいます。動画はコストがかかるものの非常に説得力があるので、ぜひ提案したいと思います。

それでは資料２に進みます。

(2)提言書構成案(たたき台)について

【事務局】

資料２に沿って説明

【末吉委員長】

皆様から活発な御意見をいただきたいと思います。どうぞ御自由に発言なさってください。

【東委員】

３ページ目の平準化策の整理についてですが、近年はダイナミックプライスになり、航空会社も本社一括の座席コントロールをしています。一次交通についてはどこにいてもどの路線でも使えますので、発地・着地という考え方はあまりないと思います。ＭＩＣＥの団体のコントロールは、発地がいいときもあれば着地いいときもありますが、修学旅行に代表されるような団体であれば、発地側でセールスマンがしっかりと打合せをして送り出すような、発地側の流通や旅行会社としての側面が大きいと言えます。一方、ＧｏＴｏのような施策の管理は沖縄でもやっています。長期休暇の分散化も、そもそも政府として国家的にはやっていないのですが、発地側でしかできないわけではないです。この部分の整理の仕方を変えたほうがいいのではないかと思います。

発地でしかできないことはここ３年ぐらいで非常に少なくなってきていますので、着地側でもできるという、能動的な形にしたほうがいいと思います。以上です。

【平田委員】

平準化の考え方の中においては、来訪者や観光客にとってハッピーな平準化の在り方、一方で島民や県民の皆さんにとってもハッピーな平準化の在り方という考え方が非常に重要だろうと思います。これを文字化して入れるのは難しいということですが、一方で沖縄だからこそできる気もします。そのようなストーリーや考え方が沖縄らしい観光の在り方であるという新しい提案として、少し強気に出てみてはどうでしょうか。ネガティブなニュアンスではなくむしろ前向きな意味で、沖縄と訪れる人たちとの新しい付き合い方をしっかりと考えていくいいタイミングだと思います。お金を落としてくれる観光客も必要ですが、それ以上に沖縄と親戚付き合いをしてくれるような、島の人になってくれる、あるいは沖縄の人になってくれるような方をいかに増やすかという考え方こそ、沖縄の真骨頂だと思います。このような考え方が共有できれば、他府県がまねできない、沖縄らしい観光の新しい形になるのかと思います。

２ページにあるオーバーツーリズムの解消だけではなく、島の人たちとよりよい新しいつながりが持てるようになればいいと思います。島の人の暮らしの中にオフとオンがあるということで、この日はこれがよいが、天気が悪ければ別の部分で島の人たちのオフの楽しみ方や暮らしを見せていくという、新しい観光のプランとしてもいいのかと思います。私は小浜島で民宿をやっていましたが、メニューにはない夜中のヤシガニ取りに行くことがあります。それはまさに島の人の暮らしですよね。島でムンチャンと言われているスナダコを夜中に取りにも行きますが、潮に合わせて実施するので日によって時間がずれていきます。このように島の暮らしというのは、自然の営みと一緒にあるものだと前向きに捉えると、毎回出会うもの、できることが異なりプランが変わるはずです。

思い切って暮らしを共有できるような考え方、それがひいては平準化に近い考え方になればとても面白いと思います。平準化の考え方の中にそのような島側の目線も入れてほしいと思います。

【東委員】

地域主導型ですね。

【花牟礼委員】

「観光×〇〇」については、ステークホルダーを増やしてほしいです。私はワーケーションを少しやっていましたが、沖縄の各地のワーケーション施設は、来る人のためにやっているのではなく、来る人と地域の人たちとをマッチングさせるためにやっているようです。例えば地域の魅力的なものを見つけることによって、「観光×地域」としての取組になっています。「観光×農業」でもいいと思います。今までの発地と着地という枠組みにもう１つステークホルダーを加えていただき、そことコミュニケーションを取ることで、観光平準化にもつなげてほしいと思います。

平田委員がおっしゃった課題⑤について、もう少し魅力的な書きぶりにならないかという点ですが、１つ喜ばしいと思うのは「稼ぐ力の向上を共通目標とした体制の構築」となっているので、観光業界から見えるものだけではなく、ほかの産業やほかの部局から見るものも一緒に進めようというウィンウィン的な発想があります。それをよりキャッチーな文言にできればと思います。

観光はリーディング産業のコアでもあるので、観光業界を盛り上げるためだけではなくて、地域なり、市町村なり、産業なり、庁内のほかの部局なりと一緒になることで、最終的には新たな気づきが生まれて、平準化の種になる可能性があると思います。例えば「県×黒島」ということで、県の方々が黒島とコミュニケーションを取って情報をもらうと、県にとっての新たな気づきにつながると思います。このようなクロスマッチング的な思想をぜひ観光業界から仕掛ける姿勢が必要かと思います。

【杉本委員】
冒頭に京都の事例紹介について、総力を挙げた体制を見本にすべきだというお話をしました。
私は、観光事業を直接営んでおられないイオンの末吉会長が、本会議の委員長を務めておられることが象徴的でいいと思っています。観光は地域の総合力だと思いますので、県においても、文化観光スポーツ部だけではなく、全体で取り組んでほしいと思います。
11ページの平準化の課題について。これまで沖縄の観光産業が発展してきたのは、もともと沖縄に大きな魅力があり、それを磨いてこられて、更にそれを発信してこられた方々の御苦労があった結果だと思います。一方、もう１つの理由としては、飛行機の供給が増えて安くなり、沖縄に来ることが容易になったことが大きな要因だと思います。沖縄には飛行機で来なければならないのですが、飛行機の供給以上には観光客を増やせないので、航空機の供給にどうしても左右されてしまいます。例えば、現在離島が活況を呈していますが、キャリアが直行便を飛ばすことなくしてこのような離島の発展はなかったと思います。どうしても航空会社の供給に左右されるということを課題として打ち出し、どのように航空会社と連携していくかを打ち手の中に項目として加えたほうがいいのではないかと思います。
もう１点、県のデータの中で、航空機を利用したインバウンド観光客の80％近くが世帯収入480万円以下という事実を見て驚きました。平準化と直接は関係ないかもしれませんが、沖縄のインバウンドの実態を表す象徴的でいいデータだと思いますので、参考資料の現況データの中にぜひ加えていただきたいと思います。

【末吉委員長】
例えば台湾からの旅行者について、高所得者層は東京や北海道、京都、中所得者層は九州、低所得者層は沖縄に来ており、その中でも更に所得の低い方が宮古・石垣に来ているのではないかと言われています。
先ほどの平田委員からの意見について。12月にテレビで、修学旅行生に対するインタビューが流れていました。沖縄のどこがよかったかを聞いたら、ほとんどが親切にしてもらったことという回答でした。沖縄のおもてなしですね。今までは水族館や首里城、観光施設がよかったという回答が多かったと思います。地域で、観光客との触れ合いをやってきた結果でしょう。これも１つのキーになるかと思います。

【平田委員】
似たような話ですが、世界のウチナーンチュ大会について。部長時代、自分たちのルーツを訪ねてくるルーツツーリズムが非常に注目を集めていました。そのようなお客さんは、一般のお客さんとは異なり、何かがあったときにも来てくれます。ツアーと言っていいか分かりませんが、沖縄応援団としてのツアー客かと思います。
最近の傾向として面白いのは、私が現在舞台をやっている尚巴志の読谷の隠れ墓を見に来るハワイからのツアーが多い点です。観光のコースではありませんが、舞台を見たことで隠れ墓を見に行きたくなり、ツアーを組んで来たそうです。より深いものを求めており、やはりルーツを訪ねて来られます。ウチナーンチュ大会のアンケートから分かったことですが、沖縄に来て一番やりたいことは、トートーメーやお墓に線香を手向けることだそうです。
ですので、根源的なこれからの沖縄の観光という話では、沖縄側がしっかりコンセプトを持ち、沖縄の良さや持っているものにシンクロしていただけるような来訪者を増やすことが必要かと思います。世界のウチナーンチュ大会というのは、沖縄らしい新しい旅の象

徴的な形のような気がします。来たときにもてなすという、ＤＮＡを大事にするべきかと思います。概念だけの話で申し訳ありませんが、そのように思いました。

【東委員】
ルーツツーリズムやオリジンツーリズムというのは、平田委員が部長だったときに一緒にやりました。
2001年の同時多発テロのとき、25万人のキャンセルが出ました。このうち20万人は自分で判断できない修学旅行生でしたので仕方ないのですが、ダイビングのお客さんについては、沖縄のダイビングインストラクターから声かけをしたら、その時期のダイビングのお客さんは120％ぐらいになり戻ってきました。ダイビングのインストラクターはお師匠さんですから、お師匠さんが安全だと言えばダイバーの人たちは疑わずに来てくれます。このようにもっと来やすい環境ができるといいのではないでしょうか。
今はＯＴＡが活況を呈していますが、例えば島の奥まで行く場合、自分で組み立てるのは大変です。レンタカーのパーツ１つがなくなっただけでも、沖縄の観光は大きく左右されるので、サポート体制のようなものはまだまだ残っていくと思います。
地域主導型のルーツツーリズムでいいですし、お師匠さんのようなツーリズムでもいいですし、それらを掛け合わせたときにとても強くなってくると思います。

【末吉委員長】
世界のウチナーンチュ大会のときは各市町村で歓迎会をやっていました。そういう取組が大事ですね。

【東委員】
そういう沖縄の良さは、なかなか来てみないと分からないので、背中を押すというか、引っ張る力をつけておく必要があります。世界のウチナーンチュ大会はあの人数でもまだまだ少ないと思います。たまたま来てみたらよかったという人が何度も来ているのだと思います。本気でマーケティングをしたら、沖縄が沈むぐらいの人数が来るのではないでしょうか。ビッグイベントを５年に１回、ミニイベントを毎年やってもいいと思います。

【末吉委員長】
いいですね。

【平田委員】
それを我々はブリッジイベントと呼んでおり、橋渡しのイベントとしてやっていきたい。５年に１度ＥＸＰＯのような大きなイベントを開催し、毎年はエイサー大会や、ブリッジイベントでつないでいくという考えです。
42万人いるウチナーンチュのうち、来ているのはせいぜい7,000人程度です。来たいけれども来られていない人たちや、情報が届いてない人たちがまだまだいるはずです。
平準化の話の中でターゲットは幅広くいますが、一番身近なところにいる人たちにまず来てもらい、その方たちとつくり上げていく沖縄の良さが、新しい旅の人を連れてくるのではないかと思います。ルーツは先祖だけではなくて、三線もエイサーも琉球舞踊も空手も本当に広がっていますが、そういった方たちがルーツを訪ねて来る場所でもあるので、本気でやったほうがいいかと思います。

【東委員】
お客さんはインストラクターについており、人気のインストラクターの予約が取れない

状態です。いろいろな分野でそういう人たちをいかに増やしていくかが重要だと思います。12月はハンマーヘッドシャークも予約が取れないと思います。

【大島委員】
そうですね。与那国なんかでは予約が取れないです。
昔、那覇・グアム間をコンチネンタル航空が飛んでいた頃、私のお客さんをパラオにツアーで連れて行っていました。路線がなくなり、内地経由ではかなりお金がかかるのでできなくなりました。
エコツーリズム協会というＮＰＯ法人が西表にあり、ウチナーンチュ大会のときに文化祭を３年に１回開催していましたが、コロナで中止となっていました。しかし期間を空けすぎるとみんな忘れてしまい、次世代に引き継げなくなるので、今年踏み切って古謡を訪ねる旅をやりました。沖縄の民謡は歌詞をよく聞くと暗いですよね。例えば、波照間島からある日突然強制移民で西表に行きなさいと言われて、西表の崎山という炭鉱で働かされた話があります。自分が生まれた島を見るために、仕事が終わってからマラリアを媒介する蚊がいる山の中を１時間半ぐらい歩いて波照間が見える岬まで行って、毎日それを見て涙を流しながらつくった歌が崎山節だそうです。歌詞は全部暗いのですが、その日その場に立ってそのとき作った歌の気持ちを理解しましょうということで開催しました。主に三線をやる方が参加しましたが、毎回すぐに予約でいっぱいになります。マイクロバス１台だけなので30人いない程度ですが、地元の方が８割とすごく多いです。
参考までに、世界自然遺産の西表の作業部会、観光管理の会議のときは、沖縄県の自然観光課の方と環境省、それから我々事業者とで話合いを進めてきたのですが、オーバーツーリズムというのは、何とぜいたくな話なのだろうと思っていました。昔は誘客するために個人事業者はお金を使って接待をして、時間を使って首都圏を走り回ったので今の形があります。それが、観光客が降って湧いたように増えたのでそれを切り捨てるというのは、とてもぜいたくなことです。
まだ石垣にＪＡＬ、ＡＮＡ系列の航空会社しかなかった頃、ピーチが飛びはじめたところ、とたんに年齢層が下がりました。それまでは航空券が高くて来られない、家族旅行などとんでもないという状態だったのでシニア層ばかりでしたが、関空からピーチが入ったことで町を歩く人の年齢層が下がりファミリー層が増えました。そこから八重山では親子３世代旅行を手掛けて、リゾートホテルでも３世代旅行が増えてきました。このようにアクセスはすごく影響するので、そこをうまく入れてほしいです。ハワイのホノルルマラソンはＪＡＬが冠スポンサーになっているので日本人ランナーが増えたのだと思います。沖縄には飛行機でしか来られないので、そのような連携も必要だと思います。
各地域の受入側は各事業者が努力しているので、それを吸い上げて連携したうえで、ＰＲしてもらえれば良いかと思います。以上です。

【末吉委員長】
今の大島委員の意見に賛成で、オーバーツーリズムというのは全くぜいたくな話だと思います。オーバーツーリズムは、まずは行政がインフラ整備をやるべきです。
座間味村は40年ぐらい前まで相当貧乏な島でした。私は大学生のときに行きましたが、私の育った伊是名よりも相当貧乏な島だと思いました。しかし観光客が増えたことで船も客を選べるまでになりました。

【花牟礼委員】
私は観光の専門家ではないので、飛行機の影響についてはそれをどのように観光政策に結びつけるのかまでは分からないのですが、大事なポイントだと思います。

オーバーツーリズムはぜいたくだという話がありましたが、例えば宮古のクルーズ船の問題も大変なオーバーツーリズムを招いておりました。観光収入にはあまりつながらないということで、私も宮古島の方々とＭａａＳでどう対応するかというプロジェクトをやっていました。人だけを集めればいいのかという議論も出てくるでしょうし、観光平準化にも関連する話なので、大事な点だと思います。

また、修学旅行を10-12月から１－２月に仮に移したとしても、資料によると10-12月も１－２月も観光収入が少ないので、少ない同士で移動させて全体としてどうなるのかまだよく理解できておらず、そこも整理をしてほしいと思ったところです。

もう１点、先ほどカレンダーの話がありました。沖縄には例えば大交易会やリゾテックなどたくさんのイベントがあり、そこに１万人規模の人たちが集まるわけですが、その方たちをエクスカーションという形でいろんなところに行ってもらい観光収入を増やしていくという考え方も必要かと思います。もちろん既にやられているとは思いますが、それによって全体の市場に与える影響について知りたいと思った次第です。

【末吉委員長】

ありがとうございます。

【東委員】

航空座席数の話は一番大事な点だと思います。ただ、国内線の供給座席数については2008年がピークになっており、それから2010年代中盤まではあまり増えていません。そこからＬＣＣが伸びたことで多少は増えているかもしれませんが、2008年がピークになっているのは、まだジャンボ機が飛んでいたからです。福岡便でもジャンボ機が飛んでおり、キャパシティとしては相当大きかったようですが、今は中型の737型機しか飛んでいないようです。このまま頭打ちになってしまうこともあるかもしれないので、注視すべきかと思います。

もう１点、場所の平準化に対してはレンタカーが大きく貢献していると思います。レンタカーがあるからこそ、カフェなどの小さいところを巡ることができます。場所の平準化をするためには、レンタカーもですが、それに代わる二次交通も必要だと思います。赤字のところであっても、地域と県とが一緒になって路線を築いていく必要があります。やんばる急行バスは、運行を続けているうちに大分お客さんが乗るようになってきたようです。

それからもう１点、弊社も県内のバスツアーで人気のあるものは、ほとんど満席になります。県民に対しては３週間～４週間前ぐらいで満席になってしまいます。これを本土から来るお客さんにも売ろうと考えています。本土から来るお客さんは沖縄に来てから、前日とかに面白いバスツアーを探しに来られます。でも人気のあるものは全部売れてしまっており、バス会社の定期観光バスぐらいしか残っていません。ですので、沖縄県全体で需要喚起するために業者を越えて沖縄の面白いバスツアー一覧のようなものを作り、沖縄行きが決まったらバスツアーから申し込みましょう、というプロモーションをするのが良いかと思います。大人のための南部戦跡もありますし、最近はＭＲＯの見学をするようなツアーもあります。大きい旅行会社から小さい旅行会社まで、合わせればそれぞれの得意とする面白いツアーをたくさんやっています。それを３週間～４週間前に押さえて来ていただければ、需要も分散して、満足度も高くなると思います。以上です。

【杉本委員】

花牟礼委員の、10-12月はそれほど観光収入が上がってないのになぜ修学旅行を移さなければいけないのかというご質問についてです。

実は、最も需要の平準化ができていないのが観光バスです。需要が秋に集中しておりほ

かの時期に全くないという状態で、秋の修学旅行を受けることができない可能性があります。今後、ガイドさんが減っていけば現在の受入さえ難しい状況です。
　ですので、観光バスが完全にオフになっている時期に移すことを検討したらいいのではないかと考えたところです。

【花牟礼委員】
　今後、全体的な量が増えるということですね。

【杉本委員】
　東委員がおっしゃったように、レンタカーは沖縄観光に必須のものだと思います。一方で、今後、運転できない方たちも増えますから、過度にレンタカーに依存しない仕組みづくりも必要だと思っています。おかげで弊社が立ち上げた本部までのバスもかなり好評を博しています。
　今後大きく北部観光の流れが変わるのではないかと思っています。あと３～４年で小禄道路が開通しますが、これによって、空港から北部までが自動車道で直接結ばれます。空港から名護まで20分おきぐらいでバスが出ていれば、名護まで１時間程で着きます。名護にレンタカーのステーションや、二次、三次交通の手段がきちんと整備されていけば、北部観光の姿は大きく変わるのではないかと思います。小禄道路が開通したらどのような交通体系をつくり上げていくべきか、名護市だけではなく県がリーダーシップを取って、名護市と連携をしながら、進めていただきたいと思います。

【花牟礼委員】
　３月に旅行で広島に行こうと思っており、アゴダを見ていたら、地元発の様々なツアーの情報が出てきて選べるようになっていました。アゴダは外国人の利用が多いので外国人向けのツアーが多いのですが、例えば原爆ドームや宮島にガイドさん付きで行くようなツアーから、弓道を外国人に体験させるツアーまで、細かい体験もたくさんあり感心しました。沖縄でもそのような形のものがあれば良いかもしれないと思いました。

【末吉委員長】
　それでは皆さん、時間が迫ってきましたので議事は終わりたいと思います。
　今日は非常に活発に御意見をいただきましたので、事務局の皆さん、これを具体化できるようまとめて、次回報告をお願いします。
　それでは事務局に戻します。

【事務局　金城班長（観光政策課）】
　委員の皆様、末吉委員長、本日はお忙しい中、貴重な御意見をいただきまして誠にありがとうございました。
　第３回につきましては２月を予定しておりますが、追って委員の皆様に日程調整させていただいて、お知らせをしたいと思います。
　以上をもちまして本日の会議を閉会いたします。本日はお忙しい中御出席いただきまして誠にありがとうございました。お疲れさまでした。

３．閉会